

末永雅雄先生採集二上山西麓の大形打製石器

山口 卓也

末永雅雄先生の花押のある紙箱に収められ、昭和30（1955）年に「近鉄電車大阪線関屋駅西南方石屑堆積地帯中」で検出されたサヌカイト製大形打製石器2点がある。この石器は、昭和61（1986）年頃、関西大学教育後援会刊行「末永雅雄 常歩無限 関西大学考古学二十年の歩み」の編集を担当していた米田文孝氏を介して、末永先生から「研究するように」との指示とともに託され、現在関西大学博物館が保管している。

現在の近畿地方の石器研究の成果に照らせば、右の石器は、弥生時代近畿地方中央部に普及するサヌカイト製打製石剣の素材厚を減ずる初期整形工程であると判断される。左の石器は、強い風化が進行しているが、幅広剥片を両面から剥離した縄文時代石核であろう。

今年、平成29（2017）年は、大正6（1917）年に京都帝国大学の濱田耕作教授や大阪毎日新聞社長の本山彦一氏が河内国府遺跡を発掘してから、ちょうど100周年にあたる。国府遺跡の発掘は、福原潜次郎氏採集の大形石器がヨーロッパの旧石器に類似しており、国府遺跡に旧石器時代に相当する遺跡がある可能性を京都帝国大学の喜田貞吉講師が指摘したことを契機として実施された。調査の結果、縄文時代の埋葬人骨や球状耳飾が大量に発見されて、当初の旧石器時代の所産かどうかの検証はあいまいとなったが、学史上近畿地方における近代的な考古学研究の嚆矢となった。

末永先生は、京都帝国大学考古学教室で濱田教授の指導を受けていた頃、国府遺跡の大形石器（現京都大学総合博物館蔵）を実見したことがあり、この2点との形態的類似に注目して、末永先生自らが選別した可能性がある。

末永先生は、続いて昭和31（1956）～32（1957）年に、奈良県立橿原考古学研究所で「二上山文化総合調査」を行なった。坂詰仲男同志社大学教授らが先史班を組織して、二上山を中心とした無土器文化の探査、二上山産サヌカイトの分布調査、大阪府側の河南町飛鳥周辺のサヌカイ

ト産出地調査、二上山屯鶴峯付近の遺跡調査などを研究課題とした。また、その一環で昭和32（1957）年3月に国府遺跡の小規模発掘を行なった。末永先生自身が明示したことはないが、この一連の調査は、二上山北麓で採集した大形石器および京都大学総合博物館蔵国府遺跡の大形石器の両者が旧石器時代の所産であるのかどうか、自ら確かめるということも主要な目的とされたのではなかったろうか。

末永先生の国府遺跡発掘の直後、山内清男、鎌木義昌両氏らによって、国府型ナイフ形石器、瀬戸内技法関連石器群が黄色粘土中から出土し、近畿・瀬戸内地域の旧石器時代研究が始まった。末永先生の着眼と一連の調査の意図は埋もれてしまったが、この2点の石器は、末永先生の、広く、そして深い目的意識の証拠として位置づけられるものであろう。



大形打製石器と末永先生花押のある紙箱



大形打製石器（左：17.2cm 右：18.4cm）

関西大学博物館学芸員